



やさしさとは何か、これを教会生活の中で考えるにあたり、フランスのアルプス山中に隠れて暮らす修道士が残した、聖母のやさしさをめぐる黙想をひもといてみたいと思います。これは、第2次世界大戦中の12月8日、聖母無原罪のお宿りの祝日に述べられた説教で、やさしさの神秘に私たちを導くものです。

聖母マリアをたたえる賛歌の一つに、「たぐいなき、こよなき、やさしき聖母マリアよ」という一節があります。なぜマリアは、比類なきやさしさをもっているのでしょうか。

マリアのやさしさとは、神ご自身のやさしさを映し出すものです。聖母は罪の汚れなく生まれ、一点の曇りや汚れもない鏡のようなお方ですので、神のやさしさをあますところなく映し出すことができるのです。

やさしさとは、神のみに与えられた態度です。というのも、やさしさと対照をなす暴力を考えてみれば、やさしさがいかに神のたまものであるかを感じ取ることができるでしょう。

暴力とは何でしょうか。それは、自分をあまりに弱いと感じる人間が、その弱さを人に見せまいとすることから、かえってその力をむき出しにし、人々を押しつぶすことに他なりません。暴力がこのようなものであるならば、神は全能であることから、弱さを人間に隠す必要がありません。そのために、人間に対して暴力をふるうことなどみじんもなく、神はやさしさに充ち満ちているのです。神のやさしさとは、その全能の力のあらわれに他ならないのです。

やさしさの原型が神のうちにあることに思いを寄せれば、生きとし生けるものに対するやさしさとは、それらを尊重し、その不完全さをも堪えしのぶことにあると納得できるでしょう。やさしさとは、教会の教えるさまざまな徳の中でもっとも気高いものですから、命あるもの、なきものすべてに及ぶのです。

さらにもう一步深めて考えてみると、知恵や知性もまた、やさしさであるといえましょう。なぜならば、ものごとを理解するためには、そのものを尊重しなければなりませんし、そのような精神の動きはやさしさのあらわれなのです。やさしさとは知的な営みなのです。ある人を理解しようとするときに、急いだり、また強引になったりすると、相手はしばしば心を閉ざすものですが、知恵のやさしさを身にまとう人は、そのような相手の心にもすっと入りこむことができるものです。

やさしさには、相手を尊重する気持ちや忍耐力が欠かせないと述べましたが、まず必要なものは忍耐力です。私たちは、多少なりとも自己犠牲を払い、自分の権利を相手にゆずることを通じて、少しずつやさしさを身につけることができます。と同時に、このやさしさは相手の心をも和らげ、その心より悪意を取り除きます。そして、聖母マリアを模範とする、隣人に対する敬意の気持ちや忍耐力は、私たちを取り囲むものすべてに向けられていると同時に、私たち自身に対しても向けられているのです。

聖母マリアが私たちの心より、とげや悪意を取り除き、やさしさのたまものを満たしてくださいませように。